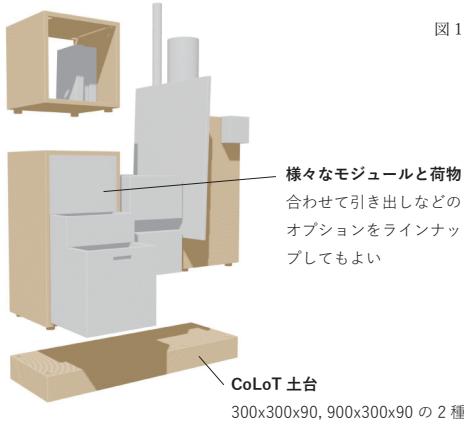


CoLoT について (小見山研究室、文責：林浩平)

web サイト： https://nciv-design.com/pj/colot_official/index.html



様々なモジュールと荷物
合わせて引き出しなどの
オプションをラインナップ
してもよい

CoLoT 土台
300x300x90, 900x300x90 の 2 種

概要

- ① キャスターを付けた CLT 板、大きさは 2 種類。
- ② 取り付け用の共通規格により相互の接続を可能とする。まず、標準の箱型モジュールをラインナップする。これによりユーザーは組み合わせを楽しむことができる。
- ③ 規格を単純でオープンなものとし、DIY を奨励する。さまざまな CoLoT が web で共有、アーカイブされ、交流を生む。(図 2)

ねらい

CLT 端材のアップサイクル手法として考案された

— JAS の認定を得るために、定期的に工場から発生する端材がある。これは使用済みの試験体であるほか小さいため、建築用途には使えず、粉碎され燃料として利用されてきた。我々はこの端材を家具としてアップサイクルすることにより、住環境の木質化や木材による炭素固定だけでなく、CLT の普及に寄与できるのではないかと考える。

木が本来持つ加工性のよさに、CLT の安定性、キャスターによる可搬性を付加することで実現する、様々な活動の「土台」

— 白い壁、硬い床、などきれいで傷つけがたい物に囲まれた今日の居住環境において、何か素材を切断し、色を塗り、ビスや釘を打ち、生活を「つくってゆく」経験は、物を大切に使うなど日常を見直す契機となる。まず何かをやってみるための土台。

この規格に接続できる活動は、CoLoT の名前前で繋がっている

— 日本には木の伝統がある。今日、それらは工芸品や、建築であれば伝統構法として存続している。しかしそれらは高価であるか珍しいものであり、一般的な生活で触れたり、見ることは稀だと言わざるを得ない。ホームセンターで買える普及品が木組みの伝統に繋がっていたら？技術に自信のある工房が、子どもの柔軟なアイデアを形にしてくれたら？複数の企業、団体、消費者が協力し、木の文化を再び活発にするのがこのプロジェクトの遠い目標である。(図 4)

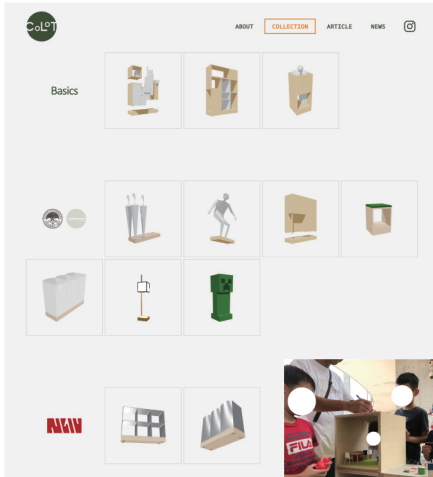


図 2、カタログサイト



図 3、積み木 WS の様子

展開 ソフト面：ものづくりをよりオープンに

加工者 (製材所/木工工場/家具工場/家具メーカー)
「製材所/木工工場/家具工場/家具メーカー」
「製材所/木工工場/家具工場/家具メーカー」
「製材所/木工工場/家具工場/家具メーカー」

技術系 (加工機メーカー/電気/情報系)
「加工機メーカー/電気/情報系」
「加工機メーカー/電気/情報系」

利用者 (一般人/オフィス/ギャラリー)
「一般人/オフィス/ギャラリー」
「一般人/オフィス/ギャラリー」

素材生産者 (製材所/製材業者/化学系材/リサイクル)
「製材所/製材業者/化学系材/リサイクル」
「製材所/製材業者/化学系材/リサイクル」

設計者 (研究室/一般人/子ども/デザイナー)
「研究室/一般人/子ども/デザイナー」
「研究室/一般人/子ども/デザイナー」

図 4

補足①: CLT について

CLT とは Cross Laminated Timber (JAS では直交集成板) の略称で、ひき板 (ラミナ) を並べた後、繊維方向が直交するように積層接着した木質系材料です。厚みのある大きな板であり、建築の構造材の他、土木用材、家具などにも使用されています。

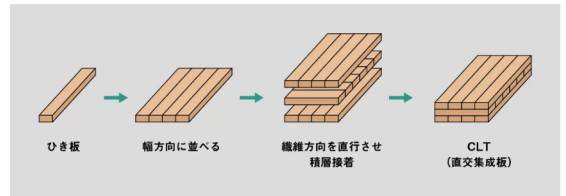
CLT は 1995 年頃からオーストラリアを中心として発展し、現在では、イギリスやスイス、イタリアなどヨーロッパ各国でも様々な建築物に利用されています。また、カナダやアメリカ、オーストラリアでも CLT を使った高層建築が建てられるなど、CLT の利用は近年になり各国で急速な伸びを見せています。特に、木材特有の断熱性と壁式構造の特性をいかして戸建て住宅の他、中層建築物の共同住宅、高齢者福祉施設の居住部分、ホテルの客室などに用いられています。

日本では 2013 年 12 月に製造規格となる JAS (日本農林規格) が制定され、2016 年 4 月に CLT 関連の建築基準法告示が公布・施行されました。これらにより、CLT の一般利用がスタートしています。(引用： <https://clta.jp/clt/>)

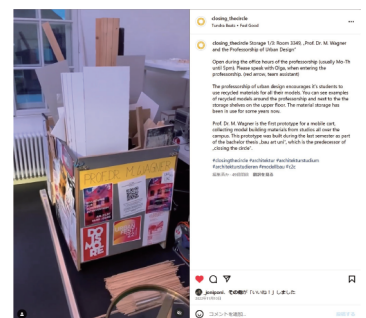
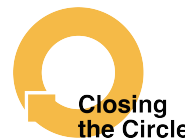
補足②: 海外とのつながり

台車を作るというアイデアは、小見山研究室と交流のあるミュンヘン工科大学の「Closing the Circle」という活動にヒントを得ている。これは建築教育の現場で材料や模型が簡単に廃棄される現実を変えたいという活動である。その一環で、まだ使えるにもかかわらず廃棄される模型材料を回収、再配布するためのカートが製作されていた。京都大学でも同様の問題があったため日本版にアレンジしながらこれに応答し、研究室独自の CLT プロジェクトと接続することで、大学を越えてものづくり一般を志向するように展開させたのが CoLoT である。

(プロジェクトページ： <https://closingthecircle.de/>)



<https://www.etree.jp/content/woodreport/industry-0003/>



Instagram より